

岡倉天心門下の画家ら、自己の独創により
たちの中で、当時その制作することを求め
筆頭と目されていたのた。とりわけ観山に
が下村観山であった。は、その実践の機会を
横山大観、菱田春草 与え、研鑽を積ませた
は東京美術学校以前、といえる。

専門的な絵画教育をほ 天心は一度は辞した
とんど受けていなかっ 東京美術学校に観山を
たが、観山は幼少より 復帰させ、観山は文部
狩野派に学び、将来を 省留学生として英国留
嘱望されていた。東京 学を果した。ラファ
美術学校で天心の薫陶 エロの模写なども残し
を受け、卒業後すぐに ており、西洋絵画研究
助教授となり、以後、 の様子がうかがわれ
天心の示唆に配慮つ つ、その技量を大いに
発揮していく。

天心は、日本の伝統る。さらに、古美術の
絵画を参照し、また西 コレクターであった原
洋美術にも学びなが 三溪に観山を紹介した 古画研究の一端が表れ

金地の異世界、時を超越

の天心であった。 「寿星」には観山の
にじみをいかした「たらし込み」がみられる

「天心の思い描いたもの」ぼかしの彼方へ」は21日まで、県近代美術館で開催。問い合わせは同館 ☎029(243) 5111。

下村観山「寿星」



下村観山「寿星」(左隻) = 1915年ごろ、絹本彩色・六曲一双屏風、福井県立美術館蔵

が、これは琳派などで用いられた技法である。金地によって場面は非現実感を帯び、濃密な気に満ちた空間のように感じられるだろう。

寿星は南天の一等星、寿命を司る星とされ、その化身である神仙が寿老人である。本作品では、金地の異世界に、時を超越して座し続けるかのようである。

(県近代美術館主任学芸員 井野功一)

